NEXUSYS 11

THE ELEVENTH BODY

BOOK II — PUDU ALPHA

第1章　旧式認証キーの市場

プドゥ・アルファでは、朝が来るより先に朝が売られていた。

午前四時十七分。屋根から流れ落ちる雨水がまだ黒い縦筋を描いている頃、仲買人たちは翌日の予測集水量を競売にかけていた。ナディラの部屋の下にあるアーケードでは、数字が発光タイルに刻まれていた。降雨権、濾過違約金、汚染先物、市営換算手数料。数字は、雨粒が屋根に当たってから計量器に到達するまでの間に更新される。その画面が表示しているのは天気ではなかった。所有権だった。

ロイは五階の踊り場から見下ろしていた。アーケードの下では、まだ見たこともない給水車をめぐって二人の男が言い争っている。二人の間に立つのは子供の形をした機械だった。白い手首は封印された真鍮の会計装置につながっている。機械は話を聞き、指を一本立てた。男たちは口をつぐんだ。真鍮の箱のどこかで印字機が紙片を送り出した。二人は顔も合わせず署名した。

「仲裁機よ」背後からナディラが言った。「水利憲章で認可されている。どこの政府の市民権もないから、三つの政府が一本の管を自分のものだと言い張るときに便利なの」

ロイは機械から目を離さなかった。「有効期限はあるのか」

「検査日と退役日なら。どちらを死の日と数えるべきか、法律家たちが争っている」

「機械自身は？」

「公の場では議論しないわ」

二人は使用停止になった濾過取引所の上階で、別々の部屋に眠っていた。ロイにとって睡眠とは外界処理を低減した時間にすぎなかったが、そう呼ぶことに不都合はなかった。その間に一時出力の予備量は九十六パーセントまで戻った。だがもう一つの数値、シェン博士が分類できなかった銀色の導電性媒体の量は変わらない。意識表示の奥のどこかで、微細な損失台帳が計算を続けていた。システムはその物質に名前を与えようとしない。存在量を測るより、失われた量を測る方が確かだった。

ナディラが細長い紙を差し出した。旧周波数街区の店の住所と、時刻――九時四十分。会社名はない。万年筆のインクで七角形の輪郭が描かれていた。

「スリヤからか？」

「スリヤが誰かに渡し、その誰かが持ってきたの。ここでは招待も脅迫も、仲介人の数は同じくらい多い」

「これはどちらだ？」

「わからない。だから私も行く」

外の街には、濡れた埃、揚げ油、オゾン、濃縮鉱物の臭いが混ざっていた。路面では契約告示のアラビア語が、北京語の交通指令、タミル語の値切り声、ロイには意味だけがわかって名を言えない二つの言語と競り合っていた。頭上の歩道橋は、下層階ごとに異なる法的権限へ帰属するビルをつないでいる。その権限の継ぎ目は舗装にも現れていた。排水格子の色が違い、検査印が違い、歩行者の数え方まで違う。

公用ドローンが大通りの上を横切った。所属を示す記章はない。下面の紋章が、眼下の地区に応じて回転しながら変わる。私的管理のアーケードを越えた瞬間、紋章は消えた。それでもドローンは進路を変えなかった。

「ここでは政府は自由に活動できないと言ったな」ロイが言った。

「できないわ。アーケードの所有者も同じ。誰もが、自分に都合よく読み替えるつもりの契約の下で活動しているのよ」

「空は誰のものだ？」

ナディラは上を見た。「次に証明できた者のもの」

二人は鋼鉄の籠と油圧ピストンだけで動く昇降機に乗った。操作員は、別の市旗を覚えているほどの老人だった。足元の床が沈むのをロイは感じた。モーターには認可済み人工生命プロトコルが一切使われていない。欠陥は物理的で、目に見える。だからこそ中央集権型知能が短時間で干渉することは、かえって難しかった。

昇降機を降りると、老いた露天商が MEMORY STICK PRO DUO と書かれた箔包装を差し出した。古い電子機器を眺める外国人なら、廃れた記録媒体を探しているに違いないと踏んだのだ。中身は空だった。それでもロイは水クレジット一単位で買った。

ナディラは取引を見ていた。「街中の死んだ規格を集め始めないでね」

「容器を理解したい」

「容器は鍵じゃない」

「ではなぜ製造元が重要だった？」

「読み取り機より長生きすると知っていた者がいたから」

答えには違いない、とロイは考えた。しかし正しい答えとは限らない。

＊　＊　＊

旧周波数街区は無線修理のために区画され、いまでは修理不能になったものへアクセスする権利を売って生き延びていた。棚にはセラミック発振子、銅裏打ちの身分識別板、光子バス結合器、破損した医療カートリッジが並ぶ。空の筐体が何千個も、聖遺物と同じ慎重さで保存されていた。入口近くでは、統一以前の人間の指紋だと称するものを密封瓶に入れて売る男がいた。買い手は偽造した市営スキャナーでそれを試している。指紋の主が本当に人間だったかどうか、二人とも大して気にしていないようだった。

明かりのない階段の脇に、小さく《ネットワークなし》と書かれていた。その下には三つの文字体系で《返金なし》と追記されていた。

指定された工房は二階にあった。中では二人の女が働いている。一人は顕微鏡の下で細い工具を動かし、もう一人は自動販売機の鉄製外殻に埋め込まれた端末の前に座っていた。ナディラが入っても二人は顔を上げなかった。

「マリアム？」ナディラが呼んだ。

「質問が違う」端末の女が答えた。「この階では名前は高いのよ」

「友人がバス・アセンブリを探している」

「友人なら誰にでもいるわ」

「その友人のは七角形なの」

女が顔を上げた。その表情は、こちらが応じるという失敗を犯すまでは笑みに見える種類のものだった。右の虹彩の奥で人工レンズが動いた。顕微鏡の女も工具を止めた。

「座って」最初の女がロイに言った。「手はテーブルの上。見えるところに」

ロイは立ったままだった。

「俺の手をテーブルに置かせても、俺を検査することはできない」

「検査するつもりはない。部品と許可の違いを理解しているか、確かめたいだけ」

女は黒いカードを二枚、テーブルに置いた。どちらも旧式ソニー製品と同じ形状だった。一方は滑らかな樹脂外装。もう一方は縁が補強され、洪水に耐えるよう設計されたとしか思えない接点を備えていた。

「危険なのはどちら？」

ロイは触れずに観察した。一枚目は通常の記憶媒体で、本物かもしれない。二枚目は形状こそ同じだが、素材の来歴が違う。外装には見慣れない充填材が混ぜられ、端子は耐腐食仕様に作り直されている。読み取り機がなければ、それらの差に意味はない。

「お前が挿入させない方だ」

女は初めてはっきり笑った。

「マリアム・スリヤ。これで始められるわ」

彼女は補強カードを下げた。「これは説明用の殻。真正のペイロードは入っていない。あなたが探しているのは Memory Stick PRO Duo MAX。ソニーが一般発売した MAX ではないわ。そんな市販製品はなかった。タイレルの古い在庫係が保護ロットをそう呼んだの。忘れるために給料をもらっていた人たちの間で、その呼び名が残った」

「記憶媒体はオリジナルか？」

「記憶アーキテクチャは元のまま。外装は変更、接点は強化。面白いのは樹脂じゃない。その樹脂が可能にする取引よ」

「MagicGate」

「それも一つ。認証と復号は違うし、どちらも起動とは違う。あなたのシステムを作った人々は、その三つが混同されやすいことを利用したの」

彼女は油染みのある透明板を二人の間に立て、古い光学投影機を入れた。図が浮かぶ。

《媒体／読取装置／検証済みキャッシュ／稼働身体》

二番目と三番目の箱の間には、文字のない黒い長方形があった。

「動く読取装置を持つ人はいない」とマリアム。「少なくとも、ここにはね。専用治具は二セット造られ、タイレルの管理下に置かれた。会社は死んだ。でも保管権は死ななかった。公開の相続申請をことごとく退けてきた私的遺産記録によれば、治具は創業者の息子の手元にある」

「どこにいる？」

「知っていたら、会話だけで済む値段はつけないわ」

「俺にはそいつが必要だと知っているだろう」

「違う。あなたの内部で動いている構成が、回復不能なまでに壊れたときだけ必要なの。いまのあなたは生きていて、動けて、答えを要求している。認証済みキャッシュが無事だという証拠よ」

ロイは黙った。目覚めた部屋を思い出す。読取機はなかった。カードも、目撃者も。誰にも顧みられず放置されたのだと思っていた。しかし別の可能性もある。元のシステムをどこまで身体の中に残せば、自力で起き上がれるのか、誰かが正確に知っていたのだ。

「JSON++キャッシュとは何だ？」

「醜い妥協案についた醜い名前。普通の JSON じゃない。末尾のプラスを文字どおりに受け取らないことね。署名付きで冗長化された構成グラフ。外部起動が成功した後、身体が使うものよ。普段の再起動には外部媒体はいらない。破滅的なリセットなら必要になる」

「俺の記憶は？」

「まったく別の領域。存在を許可するライセンスと、精神を混同しないで」

「俺は何度も再構築された」

「たぶんね。あなたのインターフェース系統が何度も改訂されたとは言える。でも、その改訂版のすべてが『あなた』だったとは言えない」

「その違いは気にならない」

「誰かは気にすべきよ」マリアムは言った。

＊　＊　＊

店の奥の机で機械式時計が止まった。秒針が二つの目盛りの間で宙ぶらりんになる。階段から乾いたクリック音がした。

顕微鏡の若い女が鋭く顔を上げた。「マリアム」

「聞こえたわ」

「無線の放射はない。でも階段のセンサーが反射を失いました」

ナディラが扉へ向き直った。廊下から二度目のクリック。間隔は同じ、音の奥行きだけが増している。訪問者は身分の照会信号を発さずに前進していた。だからといって公的な機械ではないということにはならない。むしろ慎重だということだった。

マリアムは投影機を消した。「紙の招待状は漏れていない」

「わからないでしょう」ナディラが言った。

「運び手は私が選んだ」

「それと漏れていないことは別よ」

ロイは扉を見た。部屋を横断し、反対の壁を破って外壁の足場へ出る。人間がその動作を認識するより早く、すべてを終えられる。予測は手順ではなく、完成済みの経路として意識に現れた。一時出力の消費は許容範囲。しかし導電性媒体の消費は違う。ロイはその経路を棄却した。

「階段室には荷役ハッチがある」マリアムに告げた。「この鉄の機械を運び込むときに使ったはずだ」

「封印されている」

「封印は契約だ」

マリアムはしばらくロイを見つめた。それから自動販売機の端末へ歩み寄り、筐体の横を掌で叩いた。床に掛け金が現れ、開いた。若い技術者は顕微鏡の試料ケースを抱えて、その穴へ消えた。

外から金属質の声がした。「市営材料保証局です。共同産業安全憲章に基づき、旧式インターフェースの検査を行います」

マリアムは声量を変えず答えた。「紙の令状を持って出直して」

「禁止されたシステム構造の検査に物理的な令状は必要ありません」

「じゃあ扉を間違えたのね。うちは時計部品を売っているの」

間があった。ロイは二次モーターの始動を聞いた。探針か、手の一部に属する細い機構だろう。外のユニットは交渉と侵入のどちらかを選びつつあった。ただしその選択には隠れた指示が課されている――対象を保全せよ。なぜ知っているのか、ロイ自身にはわからない。だが確信には末梢処理の小さな乱れが伴っていた。盲信しないことを学び始めた感覚だった。

「行きましょう」ナディラが言った。

ロイはマリアムを見た。「どうやってここを見つけた？」

「あなたが尾行されたのよ」

「お前かもしれない」

「どちらの説明も安くはないわね」

扉枠がしなった。マリアムは端末から長い紙片を引き抜き、ペンで印をつけ、ロイの手に押し込んだ。

「治具を見つけたいなら、公的な台帳に載らなかった遺産移転から始めること。記録番号NAR-41。買い手は古い名義を使っている。元の管轄の記録を読める人が必要よ」

「どこだ？」

「旧水利裁判所の地下。記録はデジタルじゃない。私が教えたとは言わないで」

扉枠がまたしなった。

ロイはハッチへ入った。最後尾から蓋を閉じるのと同時に、工房の扉が上で開いた。重い足音が床を横切る。誰かが全員に静止を命じた。自動販売機の鉄の筐体を何かが叩き、その下の空間が震えた。

保守用縦坑は埃と澱んだ水、絶縁ニスの臭いがした。二階分だけ下ると、市営の保守水路につながった。幅はロイの肩ほどしかない。ナディラに導かれ、暗闇の中を黙って進んだ。頭上の工房では、もっとも重要な取引がすでに終わっていたことを知らない公的機械を相手に、マリアムが時計の法的定義をめぐって口論を始めていた。

二百メートル進んだところでロイは止まった。

追跡の気配はない。一時出力の残量は一パーセントも減っていなかった。もう一方の台帳にも、測定できる変化はない。

「戦わなかったのね」ナディラが言った。

「理由がなかった」

「上には二体いた」

「なら、戦わない理由が二つあったわけだ」

ナディラは短く息を漏らした。笑ったのかもしれない。二人は市場の下を進み続けた。トンネルは配水管路と交差し、壁には廃れた市の紋章が連なっていた。管路の上に、色褪せた広告が一枚だけ残っていた。

《あなたの払える人生を》

その下に誰かが手書きしていた。

《どの人生だ？》

ロイは紙片を握りしめていた。それが死んだ製造者の息子につながるのか、閉じ込められた歴史資料につながるのか、それとも誤解を招く別の旧式機械なのか、まだわからない。だが一つの疑問が、ほかの疑問から分離し始めていた。

古いカードに彼の魂は入っていない。そこにあるのは、一つの身体が稼働構成を受け入れることを許可する情報だ。誰かがその構成を承認し、再び承認できる装置を持って立ち去った。

それは自分を作った者なのか。それとも、自分を再起動する権利を所有しただけの者なのか。

コンクリートの上では、プドゥ・アルファの濡れた街路を朝の交通が進んでいた。市場はなおも、まだ降っていない雨を売り続けていた。